

第52回 旭川荘障害医療福祉セミナー 講師プロフィール

講義3

志賀利一氏

横浜やまびこの里 相談支援事業部 部長

「行動障害を表現する人の生活支援を問い直す」

1989年に「強度行動障害」という用語が登場してから、30年が経過し、様々な国の施策と連動しながら、障害福祉の現場や養育者による支援が蓄積されてきました。一方で、著しい行動障害を表現する人への虐待がある事も事実です。

本講義では、多様な状態像である行動障害を表現する人たちへの支援施策や、医療・教育・福祉分野の取組みの変遷や、研究や実践から確立されつつある基本的な支援の枠組み、様々な地域における住まいの問題へのアプローチなどを整理します。社会的な問題として、行動障害を表現する人の生活を問い直す機会になれば幸いです。



講義4

金森克浩氏

日本福祉大学 教授

「肢体不自由児者を支援するICT活用」

肢体不自由のある子どもたちは身体的な活動の制限から意欲を失いがちである。しかし、ICT等の適切な支援機器を用意すれば本来の力を発揮する。

近年普及してきたタブレット端末や視線入力装置などを活用した事例を紹介しながら、どのようなことができるのか具体的な活用方法について紹介する。また、支援機器を活用する際に陥りがちな問題など大切にしたいことについて参加者と一緒に考えたい。



講義5

岡田美智男氏

豊橋技術科学大学 教授

「〈弱いロボット〉と人とのコミュニケーション」

最近のロボットや人工知能は「すごい！すごい！」といわれるけれど、本当だろうか。よくよく考えるなら、ロボットにも苦手なところ、弱いところもたくさんあるに違いない。いつも強がるばかりでなく、その〈弱さ〉をさらけだしてみようか。

本セミナーでは、子どもたちの手助けを上手に引き出しながら、ゴミを拾い集めてしまう〈ゴミ箱ロボット〉、モジモジしながらティッシュを手渡そうとするロボット〈アイ・ボーンズ〉、昔ばなしを語るも、ときどきモノ忘れしてしまう〈トーキング・ボーンズ〉などの〈弱いロボット〉の研究事例を紹介しながら、人とロボットとの間に生じる、お互いの〈弱さ〉を補いつつ、その〈強み〉を引きだしあう関係や、〈弱さ〉が生みだすコミュニケーションやケアの姿について議論してみたい。



講義6

中邑賢龍氏

東京大学先端科学技術研究センター 教授

「AI・ロボット時代の福祉・特別支援教育」

AI・ロボット時代の到来が近いが、新しい技術は障害のある人の能力を高めるだけでなく、彼らの生活環境を大きく変えつつある。これまで彼らに対して行われてきた教育やリハビリが意味をなさなくなることが予想されるだけでなく、福祉や特別支援教育のサービスのあり方を大きく変えるかもしれない。新しい時代の障害観と生き方を論じてみる。

